

RAILWAY & CINEMA

今回は、ブラジルの映画「セントラル・ステーション」を紹介する。この映画は、ヴァルテル・サレス監督が一九九八年に撮ったものであり、ブラジル映画として初めてベルリン映画祭で最高作品賞の金熊賞、主演女優賞（フェルナンダ・モンテネグロ）を受賞している。アメリカでもゴールデン・グローブ賞（外国映画賞）を取ったり、モンテネグロがアカデミー主演女優賞の候補になるなど世界的に大変評判の高かった映画である。特に出だしの三十分は、リオデジャネイロの中央駅を舞台に、発展途上国の大都市の鉄道駅の模様が胡散臭い人間も含めてその利用者とともに生き生きと撮られ、ブラジルに新たなネオ・リアリズムが生まれたかと思わせるほどである。

フェルナンダ・モンテネグロ扮する主人公のドーラは、駅で代書屋をやり、細々と生計を立てているが、金をもらって代書した手紙を投函せず、家で開封し、友だちと笑いの種にし、拳句の果て、捨ててしまうという性悪でひねくれた初老の女である。ドーラのところに別れた夫と再会を望む手紙

鉄道と映画 — 25

リオデジャネイロ中央駅を舞台に始まる
父を探す少年とちょっと性悪な初老の女の物語。

Central do Brasil

「セントラル・ステーション」



文・羽生次郎

text by Jiro HANYU

1946年東京生まれ、69年東大経済卒、同年運輸省入省、人事課長、運輸審議官等を経て、2002年8月国土交通審議官を退官。現在は財団法人運輸政策研究機構・会長を務める。フィルム・コミッション（FC）への取り組みなど、映画へ深い情熱を注ぐ。

の代書を依頼した子連れの女性が、ある日事故で死んでしまい、残された孤児がドーラの手を借りてまだ見ぬ父のところに旅をするというのが物語のあらすじである。こう書くとブラジルの広大な自然を背景にした典型的なロードムービーと思われる方も多いと思う。しかし、一味違うところは、前半にドーラの小悪人振りが良く描けており、単なる人情ものにとどまらず、厚みのある映画になっているところにある。ドーラは、最初この小生意気な孤児を売り飛ばし、儲けようとするが、売り先が臓器移植目当てとわかると一線は越えられず踏みとどまり、子どもに小金を渡し、旅の途中で置き去りにしようとするが失敗する。この辺りが大変良く出来ており、状況設定は全く異なるが、一人で人生を生きてきた女性が急に面倒を見る羽目になった孤児に振り回される様子は、ジーナ・ローランズが主演したアメリカ映画「グロリア」を思い起こさせる。

「セントラル・ステーション」の見所は、父を探して、広大なブラジルをバスで旅行し、さまざまな人たちとつかの間の交流をする間に、都会生活でささくれ立った女性と母をなくした子どもとの間に理解と愛情が育って行く様子が巧みに撮られていることを挙げる批評が多い。確かにバス旅行の間に見られるブラジルの広大さは圧倒的であり、筆者も、このような評価に頷けるところは多い。しかし、もし映画の価値がそれにとどまるなら、状況設定の差はあっても、せいぜい良くできたロードムービーの一つという評価になってしまう。やはり、この映画を魅力的なものにした最大の特徴は、冒頭に書いたように、主人公役のモンテネグロの存在感のある演技と、リオデジャネイロ中央駅の利用者と生活者が、リアリティをもつて撮られているところであり、これが後半の情感あふれるバス旅行との対比を効果的にしている。もちろん、中央駅は、美しいとか機能的とは縁遠く、こんな駅は、危なっかしくて絶対に利用したくないと思わせるほどであるが、世界の大都市のターミナル駅の少なくとも半分はかかる状況であるのが事実であると思う。色々と考えさせられる映画であり、一見の価値は十分にあるので、ご覧いただきたい。